

「不死」と「円周」

——エミリー・ディキンソンの永遠の「形」——

浜田美佐子

(1)

エミリー・ディキンソン (Emily Dickinson, 1830-1886) は、1775編の作品中、およそ400近くもの「死」に関する歌を作った。では、「死」の先にあるやもしれない「不死」については、どうであろうか。「不死」については、Immortality の文字の書かれている詩が42編、Immortal という形容詞が13編、又これに類似する言葉である「永遠」を加えてみると、Eternity=48回、Eternities=1回、Eternity's=4回、Eternal=5回、Eternally=5回と、その中には重複するものもあるが、およそ120近くもの、不死、及び、永遠の歌が書かれていることになる。⁽¹⁾

今、ディキンソンの「死」の歌、「不死」の歌と述べたが、論を進める前に、あらかじめ断っておきたい事が一つある。それは、彼女の詩を「死」の文字があるから「死の歌」、「不死」の文字が見え隠れするから「不死の歌」、という乱暴な分類分けを可能であると信じて、この言葉を使ったのではないという点である。既に別の論でも述べたが、⁽²⁾ 彼女の詩は、どの言葉が使われているのか、という事よりも、言葉と言葉との関係を、どのように持つのか、という、言葉と言葉の関係を微妙にずらしたり、はずしたり、反発させたり、という関係の中、その配置の中そのものに、その詩の中核をなす特質を備えている。つまり、一の歌という分類分けを、本質的に拒む性質を持

っている。

では、何故、「死」の言葉が何回、「不死」が何回、と列挙する必要があるのかとさえ、それは、あくまでも、便宜上、彼女の “I'm Nobody!”⁽³⁾ と姿を隠しては、私達の前に姿を見せるという詩の造りに一歩、より一歩と近づく為の方便として、同じ傾向の文字の使われている詩を扱うことにより、対象に近づく糸口を見出したいという願いからである。又、言葉には、「意味」が付加されているのであるから、とりあえず、ディキンソンの “Immortality” という言葉に乗って、彼女の懐深くまで、入ってみたいと願うからである。「死」でさえ、不可思議であるのに、「不死」というものを、どのように想像の世界で創り出すのだろうか。まずは、やや散文的に、「不死」という言葉の持つ意味から入っていきたい。⁽⁴⁾

(2) 不死の舞台

さて、ディキンソンにとって、「不死」とは、どういう意味を持つのだろうか。手紙(文字)のことを「不死」と似ている (A Letter always feels to me like immortality) とするディキンソンにとって、そして、その理由を、両方共、「体」という「友」を持たない「心」そのものだから (because it is the mind alone without corporeal friend) とするディキンソンに対して、⁽¹⁾ 「不死」を自然発生的な、死の後にやって来るかもしれないものとして規定するのは、あまりにも陳腐である。

手紙（文字）ですら、あるいは、それこそが、不死と同列に置かれているのだから。しかし、ここでは、まず、死後の世界としてのHeaven（天国）の詩の中に、不死の姿を求めてみたい。一体、そこに、「不死」は、住んでいるのだろうか。

P374 “I went to Heaven”（私は天国へ行きました）の中で、ディキンソンは天国を唯の町（a small Town）として描く。大文字のルビーが一つ、電燈のように辺りを照らし（Lit—with a Ruby）、地上の建築の際の木片の代わりに、羽毛で（Lathed—with Down）その町は支えられていると言う。

そこは「より静か」（Stiller）である。ディキンソン独得の不思議の世界へ入っていく時の、付けなくともよい比較級の -er は、当然ではあるが、この世のものとは思われない天国の、この世との違和感を、「より静か」と伝える。

そこは、「美しい」（Beautiful）と私達の期待に沿わせるのだが、すぐに「絵としては」（as Pictures）と格が下げられる。「まだ誰も描いたことのない」（No Man drew）という解説も、誰も描いたことのない程、美しい、とも一方では受け取れるものの、もう一方では、誰もまだ、生きてここへ来て描いたことはない、とも受け取れ、却って、ここ、天国の存在の確かさを危うくする。

天国の住人というのは、人々が蛾のようでメクリンレースで縁取られたようになっているのか、人々が蛾のようなメクリンレースを編んでいるのかは定かではない（People—like the Moth—/Of Mechlin—frames）。何故人々がクモの糸やケワタガモのやるべき事を段取るのかは分からない（Duties—of Gossamer—/And Eider—names）。しかし、ディキンソンがしばしば文法上の約束事を破って、自分の文法で語り始めるように、ここでの人々はリズムの上から言って、全体で一つとしての単数名詞であるかのように、動詞に -s の付く “frames” と “names” を述語としてとっている。地上での一人一人の個性は、

ここでは失われている。

この「天国へ行った」と旅行にでも出かけたような「私」に、ディキンソンは最後の四行で次のようにその感想を述べさせる。

Almost—contented—
I—could be—
'Mong such unique
Society—

殆んど—満足で—
私は—いられるでしょう—
これ程ユニークな
社会、では—

100%満足に対する「殆んど」（Almost）の追加のマイナス、ユニークな「社会」であるはずの形容詞と名詞の分断（a unique/Society）、“Almost”の“A”と見た目の統一がなされるはずの“Among”の“A”の欠如（'Mong）、これらは全て、この極めて希薄な存在感の「社会」—天国—の空っぽさを浮き彫りにする。

ここには、元気の出るような「不死」は見当たらない。仮に、「不死」がここに在るとしても、地上の「生」に対して魅力的なものにはなっていない。又、不死が死を越えた、プラス効果のものとすると、そういう「プラス」が、この天国の中には、少なくとも話者には見つけられていない。では、不死の舞台となってもよいはずの「天国」が、そもそも存在しないと断言しているのだろうか。否、そうではないように思う。次の詩を見てみよう。そこには、「天国」と「消えた天国」の二つが描かれているから。

P399 “A House upon the Height”（高い所の家）で、ディキンソンは天国を一軒の家として描く。この家にはワゴンは着いた事がなく（That Wagon never reached）、死んだ人が運び置かれた事もなく（No Dead, were ever carried down）、物売りのおじさんの車も近づいた事はない（No Peddler's Cart—

approached)という。否定(never, No, No)されながらも、ここでは物の行き来を表わす動詞(reached, were carried, approached)がたくさんの activities を、まだ「無かった」という形で、天国へ導き入れるようだ。

人は居るのかというと、二連目で、「煙突」と「窓」が出てくるのだが、その煙突からは煙が出た事はなく(Whose Chimney never smoked)、夜と朝を迎える窓が支えているのは“an Empty Pane”(空っぽの窓枠)と、ここには、蛾のような生気のない人々すらいない。そして、これからのこの「家」の定めはというと、

Whose fate—Conjecture knew—
No other neighbor—did—
And what it was—we never lisped—
Because He—never told—

その運命は—「推測」が知っていた—
他の御近所は—知らなかった—
そしてそれが何かを—私達は回らない舌で
つぶやいたりしなかった—
というのも「彼」は—黙っていたから—

この黙っていた「彼」は、断定する事を拒むからこそ「推測する」のである、大文字の“Conjecture”(推測)であるだろうし、あるいは又、大文字の“He”としての「神様」なのかもしれない。「御近所」(neighbor)とは「推測」の回りには、「提案」と手を上げる他の何ものもなかった事を示す。つまり、「天国は存在する」とか、「不死はある」とか。あるいは、にっこり笑いかける「神様がいる」とか。

さて、ここに登場する、語ることを決してしない神様は、Eclipseとして、手紙の中にも姿を現している。そして、このEclipseというideaは、不死の「形」を解く上での1つの鍵となるので、しばらく見ていきたい。

1862年4月25日付け T.W.Higginson (1823-1911) 宛の二度目の手紙で、ディキンソン

は自分の家族のことを次のように紹介している。

家族は皆宗教心が強く—私以外は—そして、
「食」(Eclipse)に対し、毎朝話しかけています。—彼らが我が「父」と呼ぶ。⁽²⁾

ここで神様は空白(Eclipse)である。しかし、興味深いのは、この空白は「無」ではないという点だ。何故なら、Eclipseとは光が欠けるだけで、物体としての天体である、太陽や月は、そこに「在る」のだから。

丁度、P399の“He—never told”の“He”が、「話さない」、という否定の中に登場したように、この手紙のEclipseとは、全体であるはずの円を点線でなぞれるように、あるいは、その黒く塗りつぶされたところに自分の好みの絵を掛けられるように、「無い」関係を、自分の陣地内に引き寄せる際にディキンソンが良く使う方法だ。

手紙だけでなく、このEclipseという言葉は、詩の中でも使われている。P199 “I’m ‘wife’—I’ve finished that”(私は「妻」—あちらは終えた)の二連目を見てみよう。

How odd the Girl’s life looks
Behind this soft Eclipse—
I think that Earth feels so
To folks in Heaven—now—

何て少女の人生は奇妙に映るのでしょうか
この柔らかい「食」の影では—
きっと地球もそう感じるのでしょうか
天国の人達にとっては—今—

「妻」になり、ロシア皇帝にも匹敵する力を得たはずの「私」は、少女時代を妻という肩書きのない欠如、Eclipse、としてとらえる。が同時に、自分の絶対を誇る地球サイドの視点は、太陽側から見れば、反対に欠けるのは自分側だということを、ここで意識する。つまり、ここでのEclipseとは単に、少女が妻

に対してだけでなく、妻も少女に対し、マイナスになりうるといふ、見る位置を変える事により、180度違う答えに行き当たる事の、一つのメタファーになっている。又、この「欠ける」ということは、欠ける為の必須条件、「全」をも意識させる。

よって、先程の P399に戻ると、「推測」しか知らない天国、神によって goサインを得ていない天国は、全てを否定されたのではなく、輪郭を残して消えた、と考えられる。輪郭が、例えば、ディキンソンがしばしば使う言葉である Circumference (円周)として、⁽³⁾ 意識の中に残っているのなら、この中に、もしかすると、ディキンソンが信じるに足る、死の先の世界、自分に固有の永遠、「不死」、を作り出す舞台があるのかもしれない。このことを心に留めながら、次に実際に「不死」の現れる歌を見ていきたい。

(3) 「不死」の登場

「不死」は、例えば、対魂の関係として姿を現す。P306 “The Soul’s Superior instants” (魂のすぐれた瞬間が)の中で「不死」は、魂が友達からも、地上の折からも隔絶された時、あるいは魂自体が、自分自身の全知全能以外は気付かない程、高く登った時にやって来るという。

では、この詩の中に、不死の starting point である「死」はあるのだろうか。三連目に次のようにある。

This Mortal Abolition
Is seldom—but as fair
As Apparition—subject
To Autocratic Air

この死すべき存在の解体は
滅多に訪れず—しかし美しく
丁度ばうれいのように—その根拠を
絶対的な空気にゆだねる—

ここで、“Mortal”という「人間」である我々

が、その人間である有限性を破棄する事をディキンソンは「不死」と呼んでいる。これは普通の意味での不死だと思う。しかし、この “Mortal Abolition” とは二通りに解釈できるように思える。一つは、死すべき存在を解体し、「不死」へと導くという (abolishing of being mortal=immortal)、それとも一つは、死が私達を飲み込んで生命を解体するという (abolishing of mortals)、つまり「死」であると。

よって、Immortality (不死) という文字が、mortality (死) を含むように、ここで不死は、死と共に在る。ストーリー展開としても、生命の方は、一連の “Earth’s occasion” が、下の方へ限りなく退いたということから、ひょっとすると、この人は、もう既に死んだ状態に入っているのかもしれない。

しかし、「死の歌」の場合、話者は「私は死んだ」と騒ぎまくるのだが、この不死の場合は、もう始まってしまったはずの死の先から、いつの間にか始まらなければならない為か、死であるのか、死ではないのか、その確証が持てないように描かれる。

だから、この魂の状態を narrator として伝える話者も、この魂が肉体から離れた状態であるのか、生きている人の大変辛い状態の中で求める心が生じさせた、一瞬の救いの幻影であるのかを、はっきりさせようとはしない。

いや、むしろそのことは問題とはなっていない。何故なら、この不死が、前章の Eclipse のように、殆んど点線とはいえ、その輪郭を Apparition (亡霊) として持ち、その中に、かさ、しかも非常に大きな、かさ (Colossal substance)すら持っていることの方が、言葉の建造物としては大事だからだ。

ディキンソンの作り出した「不死」は、ここに、その言葉の伝える意味内容 (この世で体験できるわけがないこと+この世を越える) と矛盾することなく、確実に、存在し始める。

更に、もう一つ、「不死」の姿を見てみたい。P679 “Conscious am I in my Chamber”

(私の部屋に誰かが)で、Immortalityは、形のない訪問者として、「私」の部屋にやって来る。

二連目で、この「形のない友」をどこかへ連れて行くのかというと、ディキンソンの詩が常にそうであるように、「無い」話、が繰り返される。即ち、一連目の小文字の“shapeless friend”は、二連目では大文字の“Him”に昇格し、この人をどこにも連れて行く必要はない(Neither Place—need I present Him)と話者が言う事により、この“shapeless friend”は「輪郭」を持つ。

これは、シャボン玉のように、すぐはじけて消える類のものとは少し違う。何故なら、彼女の言葉通り、飛び石の上を、ホップ、ステップと進んで行くと、このshapeless friendのshapeが、建造物の骨格のように存在し、唯、肉体を有さないだけなのが分かるからだ。二章の冒頭で引用した、手紙の“the mind alone without corporeal friend”と非常によく似ている。

では、この友人の存在証明はというと、その証明は必要ないという否定の形で、証明書を勝ち得ると話者は言う(Presence—is His furthest license)。又、この存在証明書は、彼が「私」に対してだけでなく、(Neither He to Me)、私が「彼」に対しても出す必要はない、(Nor Myself to Him)と言って、「私」は、この友人と対等の関係を持つ。「私」と友人との関係は、双方が互いの存在を証明する、なくてはならないものとなる。意識する、しない、に唯一の存在の証がかかっているのだから。

言い換えると、これは前章で述べた、点線と実線の間を行き来する、Eclipseと形が似ている。あるいは、円周越しの綱引きに、その存在を浮かび上がらせる、Circumferenceと形が似ている。しかし、今しばらく、具象のレベルで話を進めていきたい。

では、最終的に、Immortalityの形はどのように描かれるのか。同じ詩の四連目を見てみよう。ここで「彼」は点であり、空間となる。

Weariness of Him, were quainter
Than Monotony
Knew a Particle—of Space's
Vast Society—

彼にあきることは、もっと奇妙
単調さが
その一粒を識別することより—空間という
広大な社会の一

これは、色盲の検査で、一枚、読めませんというのが入っているように、あるいは、スラーの点描写の絵のように、この漠とした空間の一粒、一粒を知る事よりも、この形のない友=Immortalityを知る事は退屈ではないと、気の遠くなるような「私」とこの友人との距離の近さと、その領土の広さを物語る。そして、Spaceという言葉、Particleという言葉は、見えない彼を、見えない点で、ぎっしりいっぱい描写し、その骨格を空間の広大な中へ存在させたような印象を与える。

ここに、目の眩むような、読めるようで読めないような「彼」の存在が、もし目の焦点が合えば、像として姿を結ぶように思われる。つまり、ここで、Immortalityは、写実的な絵の形、人間の姿をモデルとした形として、意味の世界での実体として、限りなく「実像」へ近づいたと言える。

では、この「実像」が、不死の形なのだろうか。否、そうではない。以上の事から分かるのは、「不死」には二つのレベルがあるということだ。一つのレベルでは、文字通り、「不死」というものが、その姿を、考え得る限り、限り無く写実的に描き出される。そして、もう一つのレベルでは、上に述べた、二つのImmortalityの登場する詩にも明らかにされたように、具象の意味ではない、「不死の形」、Eclipseであり、Circumferenceでもある、空っぽの円を抽出することができる。

そして、不死の形とは、擬人化された登場人物としての不死の姿の写実的描写にあると

するよりも、むしろ、この地上では手に入れることのできない世界を、地上で取り込む為にディキンソンがその詩の中に創り出したと思われる、より抽象度の高い型、円周、が不死の姿になるように思う。

しかし、意味の世界の「不死」を、膨らんだ帆のように、一杯にまずは満たしたく思うので、不死の意味の仕上げとして、消えた不死の上に、ディキンソンが創り上げる「不死」の歌、「不死の歌」の極め付きを見ることにより、この章を、まとめてみたい。

P721 “Behind Me—dips Eternity” (私の後ろで一永遠が沈む) は次のように始まる。

Behind Me—dips Eternity—
Before Me—Immortality—
Myself—the Term between—
Death but the Drift of Eastern Gray,
Dissolving into Dawn away,
Before the West begin—

私の後ろで一永遠が沈む—
私の前で—不滅が—
私自身は—その間の条件—
死は唯ただよう東の灰色にすぎず、
溶けていくもの遠くの朝日に、
西が始まる前の—

一体「私」はどこ、と思わせる詩をディキンソンは数多く書いている。だから、この詩が特別変わっている訳ではない。しかしながら、先程の「魂」や「私」と違い、ここでは、Immortality は待ち人來たる、とはなっていないどころか、反対に、まるで水鳥が水中に潜るが如く、「私」の前と後ろで、希望の星である Eternity も、死を越えた、もう決して時の腐食にさらされないはずの Immortality も姿を消す事から、この歌は始まる。

これから演じようとする役者が舞台上上がった時、急に照明がぶつ切り切れたかのようになり、「私」は Eternity も Immortality も失った今、「私」という存在のみが、この混乱を鎮め

るとばかりに、蝶番いの役を “the Term between” として果たすようだ。

一体、この「私」は今、死の世界へ入って行くところなのだろうか。そして、既に、Heaven の詩で見たような活気のない天国を見るところか、闇としての死が、今までの expectation を全てガラガラと音をたて覆すようにして始まろうとしているのだろうか。

四行目で、思った通り「死」が出てくる。しかし、この「死」は、すぐ東の空にとって代わられる、はかないものとして描かれる。即ち、今、このどこに居るのか分からない「私」の世界では、死すらも、人間が生まれ、成長し、そして死んでゆき、そしてもしかすると、そこから不死や永遠が生ずるかもしれないという、chronological order、年代順、時の流れ、を乱す。

二連目で、この混沌とした世界に少し秩序が取り戻されるかの如く、何故、複数なのかは分からないとしても、“Kingdoms” (王国)、“Monarchy” (君主国) と、混沌からの建国のような、秩序の杵が打たれていく。そして、“Prince” (王子) はというと、“Son of None” (誰の息子でもない) と、たくさんの「彼」が、“Himself”、“His”、“Himself”、“Himself”、とこだまする。

実体を持たないような “Son of None” (無から生まれた息子) は、どんどんその抽象レベルを加速させ、“Duplicate divine” (すばらしい複製) にまでたどり着く。当然、“divine” とは神を指す。しかし、この大文字で始まる “Duplicate” (コピー) に対する、同じ [d] を頭にする小文字の “divine” は、主客逆転を思わせる。つまり、正当な神は貶められ、copyの方が、ひな段に飾られるような。ここに栄光の Immortal の世界はない。

“Son of None” は自分で自分の copy を作り (Himself—Himself diversify)、その王位に就く時代すら、彼自身へと吸収させていく (Himself—His Dateless Dynasty)。だから、この出口もなければ元もないようなアミーバが一人で勝手に増殖していくような世界には、

「神」という元が存在しないようなのだ。しかし、「複製」は、どうやって始まったのだろうか。

'Tis Miracle before Me—then—
'Tis Miracle behind—between—
A Crescent in the Sea—
With Midnight to the North of Her—
And Midnight to the South of Her—
And Maelstrom—in the Sky—

奇跡が私の前に—それならば—
奇跡が後ろ—間には—
海の三日月—
真夜中がその北に—
そして真夜中がその南に—
そして大うずまきが—空に—

ディキンソンがよく使う、全く前後関係が解明されないままの、無理矢理の並列、「それならば」という“then”が、ここにも出てくる。沈んだ“Eternity”と“Immortality”はここで、にわかにプラス表示の“Miracle”へ変身する。

しかし、この“Miracle”でプラスかとも思える三連は、一連目より混沌の度合いを増している。“Term between”としての「私」は姿を消す。間をとりもつはずの“between”は、dashで前後を仕切られる。一行目には“before Me”が書かれているので構図的には一連目と同じなのだが、骨がはずされたかのように思える。

このshiftは、結果的に天地解体をひき起こす。空にあるはずの月は海の中に、海の中にあるはずの大うずまきは空の中へと。これは、「生」という球体の反対側へ、死として出てきた為か、全てが、上下も左右も反対に映るのか。訳も分からずか、却って分かり過ぎるからなのか、話者は、この混乱した最中、秩序を取り戻すかの如く、北には、南には、と方角を示し、解体していく世界を一つになぎ留めようと努力するようなのだが、そこ

にあるのは闇だ。

では、P721には、不死は出現しなかったと考えるべきなのだろうか。いや、そうではないと思う。この異様にchargeされた解体寸前の宇宙の真只中で、「私」は、chronological orderではない、新しい宇宙の創造を、光を全く吸い取ってしまったかのような、太陽のぐるぐる巻のような、空の大うずまき、ゴッホの糸スギのような、“Maelstrom”を、きっと睨むことで宣言しているのだから。

つまり、自分の運命を、真暗な奇跡であるこの状況を、P465“I heard a Fly buzz—when I died”（私はハエがうなるのを聞いた—死んだ時）の話者と同じくらい果敢に、その不毛の様子を、不死と永遠の消えた空間に、Miracleを入れ、Midnightを意識し、空のMaelstromを凝視して、この狂った世界の誕生を「私」が大文字の“Me”としてつなぎ留める事を決定し、頑強な個を誕生させた事が、与えられた概念である既存の不死にとって代わるのだと考える。「私」が、新たな「不死」になるのだ。大文字の“M”から始まる“Miracle”、“Midnight”、“Maelstrom”、を経て“Me”へと。もっと正確には、Me=Maelstromと。殆んど死のような不死に、「私」になるのだ。

言い換えると、ディキンソンは、ここに、死によって、あるいは懷疑によって腐食され、光を吸い取られたような「不死」を創り出す。そして、既に存在する概念の中、自力で“stain”を付けた、この「不死」を、話者に「私の不死」と、identifyさせるのだ。⁽¹⁾

ここには、「不死」の訪れを受け身で、あるいは、偶然を頼みに待つ話者は居ない。代わりに、「私の不死」を自らが創り上げる、死の味を確かめた後の能動的な「私」、が登場する。「私」の「不死」の誕生。

（４）不死の形＝空っぽの円

このように、既存の秩序に寄り掛かる事なく、新しい自分の秩序をchaosの中から創り出そうとしたからこそ、P827“The Only News

I know” (私の知っている唯一の知らせは) とい
うような、骨格だけの詩をディキンソンは
作り得たのだと思う。欠ける「私」と欠けな
い「世界」との対話として。あるいは、Cir-
cumference の中と外との関係として。

The Only News I know
Is Bulletins all Day
From Immortality.

The Only Shows I see—
Tomorrow and Today—
Perchance Eternity—

The Only One I meet
Is God—The Only Street—
Existence—This traversed

If Other News there be—
Or Admirabler Show—
I'll tell it You—

私の知っている唯一の知らせは
一日中の掲示板
不滅からの。

私が見る唯一の芝居は——
あす きよう
明日と今日——
多分 永遠——

私が出会う唯一の人は
神——唯一の通りは——
存在——これは渡った

もし他^{ほか}に知らせがあるのなら——
あるいはもっと素晴らしい芝居が——
私はそれをあなたに伝えます——

これは楽天家が、世界を把握したと法螺を
吹いて、不滅、明日、今日、永遠、神、存在
と言っているのではない。このすっきりした
構造は、消えてしまう Immortality と Eternity

を認識する事から始まる。この大きさは、小
さな限界のある個が、怯まないと、Mael-
strom を空に凝視する過程を経て生まれる。

この大きさは、例えば、P501 “This World
is not Conclusion.” (この世界は終わりでは
ない。) にも見ることができる。ディキンソン
の歌にしては珍しく、一行目からこの詩には
ピリオドが付けられている。それは “not Con-
clusion” (終わりではない) と言いながら、フ
ルストップで確実に終止符を打つ。この世は
終わりでもあり、終わりでもなくなる。この
世が終わらなければ永遠はやって来ないし、
永遠がなければこの世は終わることもできな
いからだ。つまり、この世を丸でくくって、
円の中に置いたとする。すると、それをくく
った同じ言葉が、丸の外、永遠をも形造るの
だ。

それを可能にする一つの方法が、今まで見
てきたように、輪郭をなぞる行為、ディキン
ソンの言葉を借りれば、Circumference とい
う idea だ。P883 “The Poets light but
Lamps” (詩人はランプをともしだけ) で、
ディキンソンは、そのランプが本当の光を保
有していたなら、その明かりの「円周」を、
後からやって来る世代が、それぞれ自分達の
物差しである “Lens” を使い、自分達の円周
を広げていけると歌う。⁽¹⁾

Ralph Waldo Emerson (1803–1882) も
essay、“Circles”の中で、“circumference”
に言及している。まず「眼」が初めの輪。二
つ目の輪が眼のみつめる地平線の輪。そして、
この円の襷が幾重にも外へと広がっていく。
新しい idea は古いものにとって代わるべき
で、「全ての最終的事実とはたくさんこれから
引き続く series の初めの一つにすぎない」と
述べ、よってそれを取り囲む最後の “circum-
ference” は存在すべきではないと言う。⁽²⁾

エマソンの考えとディキンソンの考えとは、
根本の所では通じ合っているのだが、ここで
何故、ディキンソンにとっての Circumfer-
ence はエマソンの考えるところの circum-
ference とは違い、限界としての線とはなら

なかったのだろうか。エマソンにとって、打ち砕かねばならない壁としての circumference が何故、ディキンソンにとっては、永遠の「形」になったのだろうか。

例えば、P802 “Time feels so vast that were it not” (時はあまりにも広大に感じられる、もしそれが) で、ディキンソンは、Circumference の中と外を次のように述べて、唯の円かもしれない枠を、魔法の輪に変化させている。

Time feels so vast that were it not
For an Eternity—
I fear me this Circumference
Engross my Finit—

時はあまりにも広大に感じられる、
もしそれが
永遠に対してでなければ—
私はこの円周を恐れます
一人占めにするのではと、私の有限性を—

この円周は何を軸にして描かれているのだろうか。“This” と呼ばれる前には、“Eternity” と “Time” がある。Eternity は無論、時に縛られる事のない無限の時であり、Time の方は時計の時間だ。仮に、紙を用意し、適当に円を描いてみる。当然、有限な物の方が内側で押さえられるはずだから、円の中に Time と書き、その外へ、Eternity の無限の広がりを感じてみる。すると、この Circumference とは、Time を規定し、その有限性の度合いを、このあたりまでと区切るだけでなく、Time を限定する事により、Eternity の無限が、その広がりをはっきりと私達へ認識させることが分かる。

だから、私の有限性を一人占めにする話者が言うのは、自分自身の限界を Time 側へ属する事で拘束され、縛られたとする「時」の円周であると同時に、限界の外の Eternity が、あなたの円周はまだ狭いと、その円周を外へ広げようとさせる永遠側の個に対する覚

醒の円ともなるのだ。

抽象画を描くように、円をたくさん描いてみる。例えば、その円の中と外には生と死、あるいは、死と不死が入るかもしれない。あるいは、その中と外とは反対でもよいのかもしれない。意識するという事が問題なのだから。

この円を切り取る作業は、例えば、Indian Summer が Summer を固定しようとした方法にもそれと見てとれるし、⁽³⁾ あるいは、P299 “Your Riches—taught me—Poverty” (あなたの豊かさが—私に教えた—貧しさを) や、P448 “This was a Poet—It is That” (これが詩人だった—それこそが) というような、ディキンソンの一連の相反するものの共存する世界にも、Circumference の中と外との均衡関係が読み取れる。

全体を求めるには欠ける事が不可欠という考え方は、例えば、P579 “I had been hungry, all the Years” (私はおなかがすいていました、何年もの間) で、“Bread” (全体の円) に食傷気味になる「私」が、代わりに前の “Crumb” (欠けた円=Eclipse) の方が良かったとする詩にも見られる。つまり、“the ample Bread” を見て食べたい気持ちは失せて、よって hunger が消えると同時に、満腹の simulation も失う——言い方を反対側からにすると、満腹への道は Crumb (パンくず) によって始まる——とする詩も、Eclipse あつての全体、全体あつての欠けることの存在理由を浮き彫りにし、よって、円周の内側、対、外側と同じような働きをされると考えられる。

だから、P802 の二連目の「その除外に対し、準備する／大きさという過程を経て／驚くべき視野を／その直径が有する」⁽⁴⁾ の「除外」、「His exclusion」とは有限の時が持ちかねる、「永遠」の時側を指すのであろうが、同時に、先程から見てきたように、永遠とは有限の時がなければ生まれ得ない idea なので、どちらがどちらを除外するのかは言い難くなる。つまり、“His exclusion” を永遠から除外された「時」側として「円の中」にポイン

トを置く事もできれば、時が除外された領域である永遠という「円の外側」へ思いを馳せる事もできるのだ。

いずれにせよ、双方が円周越しに支え合ってこの円を成り立たせているのだから、どちらがどちらを除外するかは重要ではなくなる。むしろ一方に見方を固定する事の方が危険に思える。これは中身がsolidな円ではなく、あくまでも線上の円周なのだから。

(5) 永遠の形＝伸縮自在のMeasurement

以上のように、ディキンソンは、円周という魔法の紐を使って、空に円を描いて見せては消すという、自分の不死への移行の仕方を手に入れた。

ディキンソンの「死の歌」はDeathの衣で、「不死の歌」はImmortalityの衣で、共に「私の人生」を虚構の中に捕える。否、不死や死の歌に限らず、ディキンソンの歌は、痛み、喜び、悲しみ、自負等、人生のessenceを、その詩の中に捕える。そして、捕虫網で虫を捕らえるように、ディキンソンは、CircumferenceやEclipseの丸い「輪っか」を使って、「私の人生」を捕えては、生け捕りで居られるように、⁽¹⁾ 再び、「輪」を消すのだ。

もし、それが、夜空に光る大輪の花火のような輪、型、であるのなら、後からやって来る凡人の私達であっても、その中に、「おお、きれい！」や、「ああ、何と恐ろしい！」という喚声を、花火の消えてしまった夜空を見詰め、ディキンソンへ向けて、あげることができるのだ。花火のドンッと鳴った後、その大胆な形の残像の中、私達は、与えられた道具の輪の「応用」に励む。

よって冒頭で引用した、P288“I’m Nobody! Who are you?”（私は誰でもない！あなたは誰？）は、“Nobody”という形で、“Somebody”をくくるのだ。すると、「私」は、Nobodyでもあり、Somebodyにもなりうる。つまり、この“Nobody”とは私達読者という受け手を得て、“Somebody”へと変わり得る可能性を内に秘めるだけでなく、同時にそれは、

“Somebody”へと固定されない、最大限の自由を内在する可能性の輪郭、Circumferenceとしての“Nobody”でもあるのだ。在る、否、無い。無い、否、在る、と。

では最後に、不死が、不死という「意味」の世界を脱皮し、新たな造形、壊れることの決してない、モビールののように、軽やかで、堅固な骨格を持つに至る、そして、その形の種明かし、中身と形の“radical correspondence”⁽²⁾を明かして見せる詩を読んで、本稿を終えたい。P1138“A Spider sewed at Night”（クモが夜つなぎ合わせた）は次のように始まる。

A Spider sewed at Night
Without a Light
Upon an Arc of White.

If Ruff it was of Dame
Or Shroud of Gnome
Himself himself inform.

Of Immortality
His Strategy
Was Physiognomy.

クモが夜つなぎ合わせた
光りのない
白い弧の上に。

もし^{ひだ}襷襟なら御婦人用
^{からびら}経帷子なら地中の小人へ
自分で自分に伝えます。

不滅用には
彼の戦略は
自分の形自体でした。

クモが一人で糸を吐きクモの巣を作る。同様に詩人も詩を作る。最後の、その内なる性格が外へ形として現れるという骨相学、“Physiognomy”という言葉は、まさしくデ

ィキンソンの詩の風通しのよい構造を指す。不死の「意味」と不死の「形」との一致。クモの巣が、クモにとり不滅への戦略であるのなら（クモはそうやって、文字通り、生きながらえる、自分で作った網に虫を捕えて）、空っぽの円である、Circumference、Eclipseは、ディキンソンの不滅への戦略の「形」だ。

だからこそ、この不滅の「形」は、P1231 “Somewhere upon the general Earth”（どこかこの一般的な地球の上で）のように、神に対し、私達小さな人間用にと、永遠の幅を狭めないで（Oh God of Width, do not for us/Curtail Eternity!）と大きな世界を広げてみせることもできれば、反対に、P1638 “Go thy great way!”（あなたの偉大な道を行け）のように、“Stars”（星）を“Asterisks”（星印）へ縮小させることも可能なのである（For what are Stars but Asterisks/To point a human Life?）。

そして、P378 “I saw no way—The Heavens were stitched”（私には道が見えなかった一天は縫い合わされていたから）で、宇宙にさえ触れることができた「私」（I touched the Universe）の尋常ならぬ状況が、鐘のように反転すると（And back it slid）、今度は、こちらが普通であるのか、あるいは、こちらが異常であるのか、ブラックホールへ吸い込まれたかのように、“Universe”の大きな円が、それに触れることで対等となったはずの「私」を、小さな点、“Speck”に変えることで（A Speck upon a Ball）、自らも収縮するかのようになり、変化自在なもの、魔法の円周であるCircumference越しに、あるいは、ここでのように、Circumference沿いに、振り子のリズムで動くことを可能にする、折りたたみ、拡大自在の永遠の「形」のせいなのである（Went out upon Circumference—/Beyond the Dip of Bell）。

本稿で明らかにされた、「永遠の形」は、ディキンソンの詩のほんの一握りの特色にすぎない。しかし、この中に、彼女の詩の構造の基幹をなす、一つの型を見ることができると

思う。彼女の「不死」の形である、Circumferenceは、抽象画の図案のように、彼女の詩の意味を「形」へと移行させ、時の腐食に耐えられるようにした。そして、今、その型のapplicationを、今度は、私達、読者がするようにと、ディキンソンは私達読者に、その不滅の型を手渡すのだ。

[註]

(1)(1) S. P. Rosenbaum, ed., *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson* (Ithaca: Cornell Univ. Press, 1964).

(2) 『東海女子大学紀要』第9号（1989）「エミリー・ディキンソンの手紙と詩に見られる話し手と聞き手」、及び同『紀要』第10号（1990）「世界と『私』との対話」。

(3) P288 “I’m Nobody! Who are you?”（私は誰でもない！ あなたは誰？）、Thomas H. Johnson, ed., *The Complete Poems of Emily Dickinson*, 3 vols. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1955). 全て、本稿における詩の引用はJohnson版による。Pナンバーは、Johnsonの通しナンバーである。

(4) 本稿は、日本アメリカ文学会中部支部第9回大会（1992年4月19日）にて、「エミリー・ディキンソンの永遠造り—RecollectionからCreationへ」と題して口頭発表したものに、大幅に、加筆／削除を加え、軌道修正したものである。

(2)(1) L330 (June 1869) to T. W. Higginson, *The Letters of Emily Dickinson*, Vol. II, ed. Thomas H. Johnson and Theodora Ward, 3 vols. (Cambridge: The Belknap Press of Harvard Univ. Press, 1958). 以下、*Letters*と略記。

(2) “They are religious—except me—and address an Eclipse, every morning—whom they call their ‘Father’.”, L261, *Letters*, Vol. II.

(3) *Ibid.*, Vol. II, L268 の T. W. Higginson 宛の手紙で Dickinson は “My Business is Circumference” と述べている。又、Circumference という言葉の入った詩を Dickinson は 17 編 (Rosenbaum) 書いている。

(3)(1) この “stain” とは、例えば、P307 “The One who could repeat the Summer day”（夏の日を

繰り返すことのできる人は)の中で、ディキンソンの使う、その人の偉大さを図るもの、その人の創り出せる“The Linger— and the Stain—I mean”の“Stain”のことを指す。ディキンソンは染みという、体験の証、異物感の方を、染みの付かない“一般”より導ぶ。皆の信ずる「不死」よりも、特殊化された、固有の足跡のある方を選ぶ。

- (4)(1) William Robert Sherwood は *Circumference and Circumstance: State in the Mind and Art of Emily Dickinson* (New York: Columbia Univ. Press, 1968) の中で、伝記と絡めながら Circumference について言及はするが、作品の中での位置付けはされず、「限界を意識すること」を circumference の意味とするに留めている (p. 111)。

Charles R. Anderson も *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise* (London, 1963; rpt. Westport, Conn.: Greenwood Press, 1982) の中で、“Circumference”の短い章を設けてはいるが、それに続く章が“Center”である事からも分かるように、中心に対する円周という理解に留められている。

又、Thomas H. Johnson は *Emily Dickinson: An Interpretive Biography* (Harvard Univ. Press, 1955; rpt. New York: Atheneum, Macmillan) の中で、circumference がディキンソンの詩論と関わってくるとは述べるが (p.134)、それが何であるかを具体的に詩の中で明らかにしていない。

- (2) “The eye is the first circle; the horizon which it forms is the second; and throughout nature this primary figure is repeated without end.... Every ultimate fact is only the first of a new series. Every general law only a particular fact of some more general law presently to disclose itself. There is no outside, no inclosing wall, no circumference to us.”, *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson*, ed. Edward Waldo Emerson, *The Centenary Edition*, 12 vols. (1903–1904; rpt. New York: AMS Press, 1979), Vol. II, pp.301–304. 以下、*Complete Works* と略記。

- (3) 例えば、P130 “These are the days when Birds come back” (鳥が帰ってくるのはこういう

日) や、P302 “Like Some Old fashioned Miracle” (流行遅れの奇跡のような)等を頭に置いている。

- (4) To His exclusion, who prepare
By Processes of Size
For the Stupendous Vision
Of His diameters—

- (5)(1) ディキンソンがヒギンソンへ初めて手紙を出した中でも、彼女の一番の関心事は、“if my Verse is alive”であり、“Should you think it breathed”であった。L260, *Letters*, Vol. II.
(2) エマソンの essay の中で使われる、key word の一つ。 *Complete Works*, p.29.

[Abstract]

Emily Dickinson's "Circumference":
Her Way of Making Immortality

Misako Hamada

Circumference is a famous word in Emily Dickinson's poetry. This paper shows how the shape/metaphor of "Circumference" becomes/is the structure of Immortality itself in her poetry.

First two poems on "Heaven," P374 "I went to Heaven," and P399 "A House upon the Height" are examined. Here comes an important idea, "Eclipse," the word also closely examined in her letter and poem.

What is clarified by "Eclipse" is that Dickinson does not negate the existence of God, Heaven, or Immortality, but she makes us conscious of its absence. Being conscious of its absence is not the same as its total negation. For, when the moon is eclipsed, it is not the moon itself but the light that disappears. In the same manner, when we are conscious of the eclipsed body of, for example, God, by the very image of "Eclipse," we, unaware, follow the unseen line around what might be crossed out as unidentified.

Then, three poems on Immortality, P306 "The Soul's Superior instants," P679 "Conscious am I in my Chamber," and P721 "Behind Me—dips Eternity," are examined. In the first two poems, we find not merely a graphic representation of "Immortality" but what enables this graphic representation—the abstract shape of Immortality, Circumference, an empty circle. And in the last poem, we find the necessity of a disappearance of "Immortality" in our regular sense of the meaning, and the creation of a new one, which is identified as her own by the speaker of the poem as "Maelstrom—in the sky." Here, the "I" of the poem takes hold of her own "Immortality" in chaos, where even death is not reliable.

Further analysis is made on the device of an empty circle which does not only enclose but exclude what is labeled inside or outside of the circle. For example, if you draw a circle and write inside "Time", then this circle or circumference, does not only become a boundary, or enclosure for "Time", but an awakening for what is excluded by "Time" — "Eternity," as found in P802 "Time feels so vast that were it not."

And finally, by P1138 "A Spider sewed at Night," we realize not only the Immortal shape of Circumference, but why it is important in the way the speaker portrays the spider as "Of Immortality/His Strategy/Was Physiognomy."

What we find here is a "radical correspondence," if I use Emerson's words, between the content and the shape. And because of this abstract shape of an empty circle, Circumference, Dickinson can take us into the world of her poetry, where, this time, it is us who would struggle with the application of this circle, and where we can touch and see the pain, exultation, sorrow, and pride of what Dickinson registered as found in our Life.